

2022 年度
創発的研究支援事業 年次報告書

研究担当者	鈴木 俊貴
研究機関名	京都大学
所属部署名	白眉センター
役職名	特定助教
研究課題名	動物言語学の創出と展開
研究実施期間	2022 年 4 月 1 日～2023 年 3 月 31 日

研究成果の概要

本年度は動物言語学分野の創出を目指して研究課題を遂行した。実証研究は長野県の山林において鳥類及び哺乳類を対象に音声コミュニケーションを支える言語機能に関して行動実験を展開した（本実験は 2023 年度も継続予定）。2022 年 8 月にはスウェーデンで開催された国際行動生態学会（ISBE2022）に招待され、基調講演を行った（日本人初の快挙）。本講演では、鳥類を対象としたこれまでの研究成果を紹介し、動物において言語機能を解き明かす新領域である動物言語学の創設を提言した。また、実証研究の一部の成果についてポスター発表も行った。一般向けの講演会、テレビ出演、ラジオ出演などのアウトリーチ活動も積極的に行った。

本年度内に公表した論文としては、言語機能の中核であるコア併合（連続する 2 語を 1 つのまとまりとして認識する能力）をヒト以外の動物種において初めて実証した成果が挙げられる（Suzuki & Matsumoto 2022 Nature Communications）。これまでに、研究担当者は、鳥類の一種・シジュウカラが仲間と共に天敵を追い払うための号令として警戒声と集合声を連ねて鳴くことを報告しているが、その音列を受信者が一つのまとまりとして認識しているのか、2 つの独立した音声の連なりとして認識しているのかは区別されていなかった。そこで、警戒－集合の音列を 1 つの音源（1 羽を想定）から再生する場合と、警戒声と集合声を 2 つの音源（2 羽を想定）から別々に聞かせる場合とで受信者の行動を実験的に比較した。その結果、警戒－集合の音列を 1 つの音源から聞かせた場合にだけ、受信者は合成的な意味を抽出し天敵の追い払い行動を示すことが確かめられた。本研究は動物行動学、言語学、認知科学を融合した新たなアプローチにより鳥類における言語機能を明らかにした成果となり、動物言語学を代表する成果のひとつになった。